

## アスピリン喘息に対する患者認識と薬局薬剤師の啓発における課題

梅田 優也<sup>1)</sup>、河平 剛<sup>1)</sup>、合田 崇浩<sup>2)</sup>、前田 守<sup>3)</sup>、長谷川 佳孝<sup>3)</sup>、月岡 良太<sup>3)</sup>、森澤 あずさ<sup>3)</sup>、大石 美也<sup>3)</sup>

- 1) 株式会社アインファーマシーズ アイン薬局 長崎中央店
- 2) 株式会社アインファーマシーズ
- 3) 株式会社アインホールディングス

**【目的】**非ステロイド性抗炎症薬(NSAIDs)は、市販薬としても容易に購入できるため広く使用されるが、副作用のアスピリン喘息(以下、AERD)の認知度に関する報告は少ない。そこで、AERD の認知度と文書啓発の効果調べ、薬局薬剤師が果たす役割を考察した

**【方法】**2021年1~3月に当薬局に来局した患者400名に対し、紙面アンケートを実施した。AERDの認知度を確認し(以下、プレ調査)、文書で解説し(以下、文書啓発)、意識を確認した(以下、ポスト調査)。結果は、プレ調査でAERDを「知っている」「聞いたことがある」と回答した群を既知群、「知らない」と回答した群を未知群とし、有意水準0.05のカイ二乗検定、Fisher正確確率検定で比較した(アイングループ医療研究倫理審査委員会承認番号:AHD-0072)。

**【結果】**372名(既知群:102名、未知群:270名)から有効回答が得られた。プレ調査では、認知群の36.3%から既知情報の回答があり、「アレルギーの一種(70.3%)」が最も多かった。ポスト調査では、既知群では「AERDの症状(21.6%)」、未知群では「AERDの存在(37.0%)」に興味を持たれたが、「特になし(既知群:42.2%、未知群:40.4%)」との回答もあった。意識変容については、両群とも「服用法への注意喚起(29.4%、27.8%)」「咳、息苦しさへの注意喚起(17.6%、21.5%)」の順に多かったが、「特になし(37.3%、36.3%)」との回答もあり、その理由は両群ともに「不安時に医師相談(36.8%、42.9%)」が最も多かった。

**【考察】**AERDの認知率は低く、認知しても「アレルギーの一種」程度であり、啓発の必要性が示された。今回の文書啓発に「AERDの認知」「服用法や症状への注意喚起」の効果はあったが、4割近くの意識を変えられなかった。その理由の多くは「不安時に医師相談」であったが、AERDの認識をもった相談は早期発見につながるため、啓発方法を改善してAERDの認知向上に向けて取り組みたい。

(第15回日本薬局学会学術総会(2021年11月, Web)にて発表)